

イタリアルネサンス芸術がエゴン・シーレに与えた影響

ーシーレ蔵書リヒャルト・ハーマン著『イタリア初期ルネサンス絵画』を中心にー

金田佳子

エゴン・シーレの擁護者で友人でもあったハインリッヒ・ベネッシュの息子兼美術史家のオットー・ベネッシュは1966年に「もはや現存しないエゴン・シーレ作品への回想」という寄稿文をオットー・カリーア著『エゴン・シーレ絵画全作品集』の中で公表している。そこでオットー・ベネッシュはシーレがすでに1913年にリヒャルト・ハーマン（以下ハーマン）の本『イタリア初期ルネサンス絵画』を所蔵し、当時彼らが一緒に読んでいたことや、またシーレがルカ・シニョレッリの作品に熱中していたことを記述している。

また、オットー・ベネッシュは当時の逸話を以下のように報告している：「私は、シニョレッリは現代の全ての芸術家たちよりも偉大であると述べた。私の父は、シーレも彼と全く同様に価値があると反論した。しかしシーレは笑いながら、[私はこの大きな車輪の下のみじめな小人にすぎません]と、私に賛同した。」

さらに1915年にオットー・ベネッシュはウイーン、アルノット画廊で開かれたシーレの共同展覧会カタログ序文で、シーレがただの急進主義者ではなく、過去の芸術を無視せずに受け継いできたことを記しているのである。

1916年には作家で批評家のレオポルド・リーグラ（以下リーグラ）は『グラフィッシェクンスト（グラフィックアート）』の中でシーレはゴシックと初期ルネサンスを継承していることを意識していると執筆している。

それ故筆者は、シーレが彼独自の画風を確立していく際にどのように巨匠たちの作品を参考にしていったのかについて大変強い興味を持った。

近年キンバリー・A・スミス（以下スミス）によりシーレ芸術に対するゴシック芸術の影響についての研究がなされた。また2011年には、ヨハン・トーマス・アンブロジー（以下アンブロジー）により、ビザンティン芸術とシーレ芸術との関係についても研究されている。

同様にシーレとイタリア初期ルネサンス芸術についての関係を研究することは、大変意義のあることと思われる。この視点はシーレ研究において今まで深く掘り下げられてこなかった。

それについて本論文の中で取り扱って行きたい。著者はシーレが所有していたハーマンの本を通じ、シニョレッリ芸術がシーレにインスピレーションを与えたのではないかという点に注目し、考察する。またハーマンの図版にはシニョレッリ以外のイタリア初期ルネサンスの画家の作品も多く含まれていた。それらの作品もシーレが参考にした可能性も考えられ、それらについても本論文で追及して行きたい。